

開催の趣旨

この国際研究集会は、書陵部漢籍研究会が、宮内庁書陵部との協定に基づき作成したデジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」の公開を記念し、研究の成果をご報告するとともに、漢籍書誌学に関係して活躍されている国外の研究者をお招きして、講演とシンポジウムを開き、広く日本の漢籍にご関心をもたれている皆様と意見を交え、漢籍書誌学、文献学、日本文化研究の将来を考え、見通そうとする催しです。

私ども書陵部漢籍研究会は、2012年に、東京大学東洋文化研究所と慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に在籍する東洋古典文化の研究者が、組織の垣根を越えて結成し、宮内庁書陵部による深いご理解とご協助の下、当部収蔵漢籍の再検討を課題としている、漢籍書誌学の研究グループです。

書陵部に収蔵する漢籍は、江戸幕府の紅葉山文庫に由来する書物の粋をあつめた善本を中心に、宮家、公家、諸大家の伝本をも併せた、日本蔵書史の背骨ともいべき枢要の書物群と言え、善本の多くは鎌倉時代の金澤文庫や、南北朝室町時代に隆盛した五山禅院に溯る来歴をもっています。従って書陵部の漢籍は、早期に書写され、印刷流布されたことの実証、古文献としての意義を内蔵しているのと同時に、日本人に求められ、解釈され、また長きにわたって宝蔵され、日本の言語文化を涵養する大きな源となった、ということもできます。つまり、世界的には、漢字文化圏の図書遺産を代表する収蔵の一であり、同時に日本の文化史を裏付ける学術資料でもあり、その価値を勿々の間に汲み尽くすことはできません。

書陵部漢籍研究会では、この蔵書の性格に鑑み、まず多方面からの関心に供するための、書誌学的再検討を加え、基礎を打ち直すことに課題を見出してきました。しかし、今回のデジタルアーカイブ「宮内庁書陵部収蔵漢籍集覧」の作成と公開は、これまでの活動のささやかな経過報告に過ぎません。現在も書陵部の漢籍に照明を与え続けている『図書寮典籍解題 漢籍篇』の刊行から半世紀を経た今日、情報技術の革新や海外との交通拡大は、日本の書誌学研究にも新しい局面を開いています。内外の資料との比較研究により、古典的研究を着実に改新していく試みは、なお緒に就いたばかりと言わなければなりません。私どもでは、この度の集会在、漢籍書誌学、文献学や、日本文化の研究をさらに進めていくための、新たな節目となることを願っています。

図版解説



大方廣佛華嚴經〔80〕卷存卷19,22和大2軸
〔唐釋實叉難陀〕譯〔奈良後期〕寫〔大坂〔廣川〕等〕
〔一切経〕本〔東大寺尊勝院〕舊蔵

唐代に流行した華嚴宗の根本經典で、新訳の80巻本に当たる。奈良時代後期の雄渾な書で写された本品は、巻22末尾の背面の書付けによって、当時の宮廷の制作による一切経の一部と判明します。

書付けに「大坂」とあるのは、写経生の大坂広川のこと、校正を務めたのは、大伴鯉麻呂と高向浄成の2名です。「正倉院文書」には、宝亀年間(770-80)における、この広川の新訳『華嚴經』第二帙書写の事績が、明記されています。また、その他の書誌学的な検討から、この2巻が、現在は宮内庁正倉院事務所で管理する「神護景雲二年御願經」の、欠けた部分に当たっていることがわかります。

この一切経は、もとは東大寺尊勝院の聖語蔵に伝わったものであり、千数百年を経て、当時の一切経書写の息吹を伝える貴重な経巻です。



論衡30卷 闕巻26至30 唐大12冊
〔漢〕王充撰〔宋孝宗朝〕刊〔浙〕
明治26年細川十洲識語〔狩谷掖齋〕舊蔵

漢の王充が旧習を批判した思想の書『論衡』は、広く明版系統の本文によって読まれてきましたが、この書陵部蔵12冊本は、宋代版刻の善本であり、流布の本文より優れた点が多くあります。

この伝本は、版式と字様や刻工名などの版本的な検討によって、南宋前期、孝宗時代(1162-89)の、浙江方面の刊行と見られます。

この伝本には末尾に、貴族院議員の十州細川潤次郎による明治26年(1893)の識語が附され、狩谷掖齋の旧蔵と紹介されていますが、確かに『經籍訪古志』巻4には、掖齋の蔵書楼である求古楼の蔵本として、本品が著録されています。末尾の5巻を欠くことは惜しまれますが、日本伝来の善本として、中国伝来の版本と合わせた、さらなる活用が望まれます。



駿府御讓本収納箱

宮内庁書陵部に収蔵する漢籍の伝来を考える時、明治期の内閣を経て移管された江戸幕府の蔵書、紅葉山文庫本の存在を抜きに語ることは出来ません。

紅葉山文庫は江戸時代を通じ、將軍や幕閣、幕臣の参考に供された、幕府公用の書庫として、当時の日本を代表する文庫に成長しました。歴代の御書物奉行たちの調査や考証は、日本における文献学の先駆けとも言えます。

紅葉山文庫の礎となったのは、駿府に集められた徳川家康の蔵書です。鎌倉時代に収集された金沢文庫本や五山禅院の秘本を手に入れた家康は、蔵書史の上でも一時期を画しましたが、慶長18年(1613)以降、その蔵本は駿府から、江戸の將軍秀忠のもとに送られ、新たな文庫形成の端緒となりました。

駿府御讓本とは、紅葉山文庫の基となった家康生前の寄贈を記念し、文化14年(1817)に名付けられた呼称で、往時の収納箱が、その来歴をもの語っています。